

人物往来

1. 素晴らしき人との出会い



ピアノリスト北海道教育
大学岩見沢校准教授
大友 岩見沢 准教授

深井 尚子

ました。

音楽家は、「自分の音楽だけを主張しても聴衆がいなくて演奏会は成り立ちません。コンクールで優勝しても、毎年、優勝者は出ますので、そのタイトルにしがみついても、ファンを獲得することはできません。今思えば、そのようなパーティーには、反感を持ちながら、一人でも演奏会に足を運んでくれる方と知り合いたいと出席していたのだと思います。

しかし、私は、そのようなパーティーで素晴らしい文化人とめぐり合うことができました。パウル景気の中でも浮き足立つことができない、大企業の社長クラスの方たちでした。そのようなパーティーでは、野心むき出しの青年実業家とは異なり、芸術家に対しては、専門家として認めるという雰囲気があったと思います。いまや、どなたの紹介だったか思い出します。これはできま

なから、その「素晴らしき出会い」を語っていきなさいと思います。

その前に、私が新進ピアノリストとして日本で活動を開始した1980年代後半から1990年代前半の日本の様子から思い起こしてみたいと思います。当時、日本はバブル景気のさなかで華やかな活気ある時代でした。企業もメ

セナといわれる芸術文化への投資をさかんにし、冠付きの大掛かりな演奏会も企画されてい

ました。

また、特に東京では、毎日のように、「異業種パーティー」と称する、1000人を超えるパーティーが有名ホテルで開催されていました。そこには、野心を持った実業家が集結し、自己主張しながら名刺を交換しあつたというものでした。そのような風潮の中で、演奏家である私たちが音楽家としての波に乗せられるように、そのようなパーティーに出席し、聴衆を得ようとしてい

郷土文芸

=中空知=

浦白短歌会

かけ足の春におさし花々は寝気まなで
薬も添えて咲く 井下 隼子

をしたことがない。

足元は悪く荷物は重く、岩場の先端は遠い。曇天の空と水平線は同じ色でつながり、白波は押し寄せる。先を行く友人は器用に打ち寄せる波を避けて進んだ。私は引く波の間隔にまで体が対応せず、岩間から打ち寄せる波し

靴下ください

石田 恵子

も美味しい魚

ぶきに濡れた。

竿を立てた三脚の足元をさうつよつに波は打ち寄せる。海面はうねり、目印の赤い浮き

岩場に狙いを定めて友人と出掛けた。私は岩場で釣り

雑記帖

去年の夏、東京から遊びに来た友人夫妻をソメスに案内したことがある。今回、砂川の交通事故をニュースで見たのだから、電話がかかってくる。

「あの現場、どこ」
「あれ、ソメスに曲がる」
「ええっ……」

時の加護

空知管内在住作家 不破 俊輔

言葉が詰まるのはよくわかる。被害者の立場になってみればこんな理不尽なことはない。事故という名の殺人に遭ったのだから加害者を極刑に処してほしい気持ちになるのは人情だ。しかし、法というものはあるのだから被害者の身内のも市民も私刑(リンチ)をせずじつと耐えている。そして法の欠陥をよりよいものに変えていかねばならないと強く願っている。

法が現実にはそぐわないというのなら、一生懸命に国民に訴えて改正していくのがまともなやり方なのではないか。合理的な意見が伝わらないが知らぬ顔をするほど国民は愚かではない。私は日本国憲法を憲法とは思われないが、仮に憲法だとしても、それを改正してから執行していくのがまともな人間のやり方ではないのか。

ソクラテスは悪法を知りながら、しかも逃げることもできなかったのに、法は治法からといって

て毒殺の刑に服した。アペ氏だってそれだけの倫理感を持たなくては行けない。得意の倫理感。保守穏健な政治家が、今の憲法第九

条は国際現実にそぐわないから、といって真摯に説得すれば、国民は案外憲法改正に同意したかもしれない。しかしアペ氏の元じや嫌だ。怖い。

ソクラテスといえば、今の原稿を書いているのは六月二十九日夜だ。ギリシャで取りつけ騒ぎが起きている。ギリ

シャはデフォルトするか。私はするとと思う。たとえ今しな

目はずく耳は遠くて聞えぬと歳をわすれて今日も散歩に
園児等の明るい声が通り過ぐそれぞ背中に
にリツクの花咲く 本間マキ子
初智(一)孫、産まれし夕は赤飯の湯気と
奏でる妻のハミング 森 一喜
金盞に二詠歌唱える僧侶らの静寂(じま)を
をわたる声 朗明と(高野山) 森 小夜子
家々の庭に咲く花チユウリップ赤さがとて
に目に沁みる 和田 トメ

砂川短歌会

雪のころ沼に立ち寄る白鳥のただ憩へかし
遠きシベリア 徳富三十六
一刻の猶予許さぬ人を乗せドクターヘリは
頭上を馳せる 鹿野 嘉子
歪の流れくる間に一首なす床しき古都の曲
水の寛は 谷内 巖
ビラ入れの途次に見つけた露の臺 政治の
春を呼んで弾くよ 辰川 英後
少雪で早くも春のおくりものスカーパーに見
る行者にんじく 谷内 静子

川縁の粗目(さらめ)雪融け路の暮枯葉押しのけ花咲かせたり 吉田 光弘
道はたの枯れ芝あげて一輪のクロッカスの
紫を明るむ 鈴木貴己子

滝川柳社

お喋りは女の靴下のよこれ 大橋 政良
落ち着いた暮らしがほしい欠け茶わん
なやかな日差しへ今日の椅子があり 菅原とし
柴田キヨ子

今井 久子

花林短歌会滝川支部

田中 忠幸

滝川俳句会

大江ミヨ子

春陽なか桜並木を友とゆくつす紅の風はほにふれる 大野 弘子
我が心わがものなれど如何にせん持て余すこと日々多かりき 石山 キエ
満開のえき山桜のどりに桜公園心もおど

万緑の庭を愛でつつ午後の句座
仰ぎみる先師の句碑や青田風 児玉 佳恵

アイヌ語

よもやま話

■59■

恐ろしい伝染病

15世紀に流行した天然痘

岩見沢市在住

山下 栄光

人類の発祥の地はアフリカであると言われていますが、伝染病も人類の発祥地から始まったのではないかと考えられます。

食料を背負い川の中を通って山の中に逃げ込むとありま

配達員・集金人募集

随時、登録受付中です。お問い合わせは 0126-22-3700 プレス空知まで